

2019
おもろ
チャレンジ

ドイツの職人の「就活」を探る

法学部 4年

柳澤 彩

ドイツ

2019年9月6日-

2019年10月16日



渡航概要と内容

「ドイツの職人の『就活』を探る」と題して、ドイツの教育制度と労働システムについて調査を行った。

ドイツの教育制度について

ドイツでは義務教育の途中、初等教育が修了した段階で学校制度が職業と直結した以下の3つに枝分かれする。

- ①大学進学を前提とするギムナジウム (Gymnasium)
- ②専門学校の色彩の強い実科学校 (Realschule)
- ③手工業の職業訓練をメインとする基幹学校 (Hauptshule)

生徒は10歳の段階でこのいずれに進むか、すなわち将来どのような職業につきたいかを決めなくてはならないのだ。

調査結果

学校選択が生徒主導ではなく、初等教育過程である基礎学校 (Grundshule) の先生主導で行われること、そして明確なガイドラインや成績基準が存在せず先生の「主観」が生徒の将来を左右することを危惧する声が多かった。基礎学校の先生は慢性的に不足しており、不足が深刻な地域では生徒とのつながりも薄いため、ヨーロッパ系の名前の子供は①へ、アラブ系の名前の子供は②へ、という機械的な上に差別的な割り振りが公然と行われているケースもあるという。

ドイツの大学は従来博士課程までの一貫制であったが、近年ヨーロッパ基準に合わせるため学士・修士が設置された。このことにより、「とりあえず大学」という考え方が広まっているという。

(大学進学率は10年前までは概ね20%であったが、ここ数年で50%近くにまで上昇した)このことは、横並びの制度であるはずの3種の学校に、強烈な上下関係(「①に受かるか/①に受からないため②③に進むか」という感覚)をもたらしている。今や手工業者になるにしても、①に通っていたほうが将来国家資格の取得に有利であるという発想もあり、このことは3種の学校制度がその本来の目的を失い、上手く機能していないことを表しているといえるだろう。

制度上②③に進学後、①に編入することは可能であるが、実際は不可能に近い。10歳の時点での決定が、その後の人生を強く支配すること、特に「上昇」が不可能であることが、②③進学者に強い不幸感をもたらしている点を指摘する声も多く聞かれた。

当学校制度は現状、ドイツにおけるブルーカラー/ホワイトカラーの分離・差別構造を再生産するものであるといえる。

Wandergeselle の文化について

ドイツには現在、職場で有給のインターンのように働きながら専門の学校に通う職業訓練制度がある。当職業訓練制度には大きく分けて手工業系のもの(大工やパン職人など94種)と工業系のもの(IT関連など400種以上)があるが、いずれもGeselle(ゲゼレ、職人)とMeister(マイスター、親方)という二段階の国家資格を設けている点が特徴である。この制度は13世紀頃、ギルドの一種である手工業組合(Zunft)の成立とともに確立された、Ausbildung/Lehring(徒弟)→Geselle(ゲゼレ、職人)→Meister(マイスター、親方)という三段階の制度を起源に持つ。制度の内実は大きく変化したが、中世以来の伝統を未だに残している部分もある。

中世以来の職人文化を現在に伝えているものの一つが、今回私が調査したWandergeselle(ワンダーゲゼレ、遍歴職人、journeyman)である。これは、各都市を巡って様々なMeisterの下で働き、技術を磨くという修行であり、Geselle資格取得後、Meister資格取得前に行われる。19世紀頃まで、このWandergeselleはMeisterになるため必須の修行であった。

現在、このWandergeselleは義務ではなくなったが、依然として年間500人程度がこの修業を行っている(Wandergeselleは特定の団体に所属しないため、正確な数は分かっていない。Wandergeselleの派閥のようなものが9つあり、いずれも40~50人程度の規模であること、また派閥に所属しない者もいることから500人程度と算出した)。

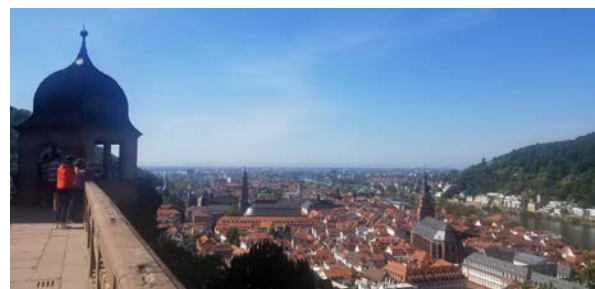
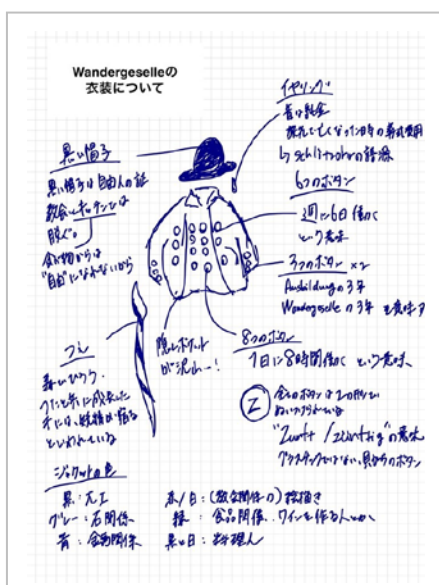
調査結果

現代のWandergeselleは、ドイツ国内だけではなく、世界中を修行の範囲として捉えていることが分かった。Wandergeselleが期間中肌身離さず持ち歩くWandergeselle Buch(ワンダーゲゼ

レ本。滞在許可の印や Meister からの就業証明書をまとめる欄がある)には、各国政府に対して滞在許可を求めるページがあり、彼らが世界中で活動を行うことを可能にしている。私が話を伺った元 Wandergeselle の Johanna さんは、日本、カナダ、ニュージーランドで修行を行い、現在 Wandergeselle 中の Anna さんはフランス、ベルギーで修行を行い、来年には大陸を横断しつつ日本に向かう予定であるという。手工業者は各国におり、それぞれ独自の技術や道具を持っている。それらを学び、融合させることが現代における Wandergeselle の役割なのだと分かった。

Wandergeselle という修行が、手工業者自身の内面にポジティブな変化をもたらすことも分かった。エリート志向の強いドイツにおいては、手工業者は社会のヒエラルキーのなかで「下」に位置するという考え方が存在しており、手工業者自身も自らをそのように思ってしまう節があるという。Wandergeselle を行うことで、手工業者は自らが長きに渡って続く手工業の歴史の中にいることを再認識し、自らの「手」があればどこでも食べていくことができる手工業の素晴らしい特徴に気づくことができ、自らの職業に対する誇りを得ることができるという。

また、Wandergeselle という存在が手工業以外の人々に与えるインパクトも感じた。Wandergeselle は常時中世風の衣装を身にまとっているのので、すぐそれと分かる。衣装に気がついて、ご飯に誘ったり、家に招いたりする人もいう(これを目当てに Wandergeselle のような格好をする乞食もいる。そのため、偽 Wandergeselle を見破るための暗号が口伝で伝えられており、市や Wandergeselle の各派閥が偽 Wandergeselle の発見に努めている)。Wandergeselle と話すと、自分がお金、国、時間等、いかに多くのものに縛られているかということ、また、それらは確かに現代社会を強く支配しているものではあるが、絶対的なものではないということにも気づくことができる。「自分たちのような存在が社会にいて、そのような存在を日々目にする。これによって人々は、今自分たちが『絶対』だと思っていることが、『絶対』ではないかもしれない。もしかしたら他に選択肢があるかもしれないと気づくことができる」と Wandergeselle 中の Anna さんは話していた。



渡航中に日本との文化の違い等から苦労したこと

・日曜定休

ドイツでは日曜はスーパーマーケットも含め、ほとんどの店がお休みになる。知ってはいたが、本当に町が閑散としていたのでびっくりした。いささか治安が悪くなる印象もある。

・電車のチケット

ドイツでは駅に改札がなく、抜き打ちでチケットをチェックされる。チケットが複雑で、分かりにくい上、間違ったチケットでも電車に乗れてしまう。

渡航中に起こったトラブルとその対処方法

・クレジットカードが使えない(1 度目)

JCB デビットカードと Master カードを持っていった。だが、店によっては Visa しか受け付けないというところもあり (Master のロゴが書かれているにも関わらず)、通信エラーも多い。

デビットカードの現地引き下ろしサービスを使用しようとするが、エラーが出てうまく行かない。

コレクトコールでクレジットカード会社に連絡すると、①IC チップの不良か、②通信エラーの影響で一時的に限度額に達してしまった。とのこと。

結局②で数日後、新しめの機械で引き下ろしが出来た。

①の場合は、日本でしかカード交換ができないとのこと。タッチ決済などの登録を渡航前にしておくことを勧められた。

・クレジットカードが使えない(2 度目)

最終週 JCB カードが、理由は分からないが利用停止になった。時差の関係でなかなかサービス会社に連絡ができなかったため、インターネット上の支払いを Paypal で銀行口座から直接行った。日本で予め Paypal を登録しておいて良かったと思う。

・帰国便の変更と保険の延長

帰国便が変更になり、渡航期間が延長になった。

海外からは直接保険期間の延長ができないため、日本にいる親に延長を依頼した。保険会社のサービスカウンターは土日祝も電話が通じるが、ここでは保険の延長手続きはできない。代理店が台風&祝日の影響で数日間対応してくれず、手続きが完了するまで一時的に保険がきれてしまった。

何事も起こらなかったため、問題はなかったが、保険の延長手続きはタイミングが合わないと時間がかかるということを感じた。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今までの自分が経験してきたこと、そして学んできたことが、自分では想像していなかったような形でつながっていくのを日々感じていました。

自分が「おもしろい」と思っていることを、他人にも「おもしろい」と思ってもらい、一緒に追求したいとまで思ってもらうには、自分が何故「おもしろい」と思っているのか、何故興味が向いたのか、自分自身の過去の経験を丁寧に分析して、そしてそれを語る必要があります。特に、異なる文化圏の人に「おもしろさ」を伝えるには、双方の文化や制度の違いを客観的に抑えたうえで、自らの経験を語る必要があります。知識を得ることの目的は、この語りを可能にすることなのではないかと感じました。

日本の教育は知識詰め込み型、アカデミックは知識重視すぎるとの批判があり、大学入試制度改革に代表されるように変化が訪れようとしています。私は今回の渡航を通して、問題は知識詰め込み・知識重視にあるのではなく、「知識を得ることの目的を捉えないままに」知識を重視していることにあると思いました。「おもしろさ」を追求する上で、知識は不可欠です。

当おもしろチャレンジは、一見知識重視のアカデミックに対するアンチテーゼのように思えます。渡航前、私自身そのように捉えていました。しかし、本質はそうではなく、アカデミックがなぜ知識を重視するのか、それを体感することにあるのだと感じました。

また、今回人が「おもしろい」「楽しい」と感じる時のエネルギーの強さも学びました。多くの方が私のプロジェクトに協力し、力を注いでくださりました。このことは彼らの優しさ、親切さに拠るところも勿論ありますが、彼ら自身が「おもしろい」「楽しい」と感じてくださったことも大きかったのではないかと思います。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

自分で問題を見つけ出し、計画書にまとめ、大学からお墨付きをもらい、自分自身の手で実行するという経験は私に様々な面で自信を与えてくれました。特に、私の純粋な興味に対し、賛同してくれるスポンサーと、協力してくれる方々がいる、そういう人脈を私は幸運にも持っているということを確認できたことは、大きな安心、そして自信となりました。

今後は、この経験を生かし、私自身が誰かにとってのスポンサー・協力者になっていきたいと思っています。

本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

私が本プログラムに応募しようと思った際、ネックになっていたのは「自分には専門性がない」

ということでした。過去の採択者を見ると、大学で研究してきたことや自分が趣味で続けてきたことをテーマにしている方々ばかりです。彼らと比較すると自分にはそういった「専門」と呼べることがないと思い、計画書を書きあぐねていました。

そこで、「自分には専門性がない」ということ自体をテーマにしようと思い立ったのが私のプロジェクトの出発点です。日本では文系の大学四年生に専門性がないのは「当たり前」、大学でしてきた勉強と全く異なる職に就くのは「当たり前」ですが、これは必ずしも他の国では「当たり前」ではないのではないか、日本独自の制度、特に教育制度によってもたらされたものではないか、と考えたことがドイツの教育制度、そして職人の教育制度への関心へとつながっていきました。

おもろチャレンジをしてみたいけど、できない。と思っているのなら、そのできない理由そのものをテーマにしてみてください。

漠然と関心の対象が決まったら、おもろチャレンジの核となるような何か「おもろい」ことを探すことをおすすめします。幸い京都大学には多様な関心と知識を持った先生方、職員の方、学生そして留学生が揃っています。私が Wandergeselle というドイツでもなかなか研究している人のいない、でもとても「おもろい」テーマに出会えたのは、「ドイツの教育制度に関心があって、特に職人について気になってるんだけど、何か『おもろい』風習とかない？」とドイツからの留学生に聞いたことがきっかけでした。

このプログラムは修士や博士よりも、学士向けのプログラムとして打ち出されています。学士が自分の「研究」をできる機会はなかなかありません。この機会を最大限に活用してみてください。

主な奨学金の使途

*宿泊費

*現地交通費

*食費

*通信費、海外旅行保険料 など

(渡航費はマイルを使用したため0円)

